



Informatica® Cloud Application Integration

October 2023

新機能

© 著作権 Informatica LLC 2020, 2023

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica Cloud、Informatica Intelligent Cloud Services、PowerCenter、PowerExchange、および Informatica ロゴは、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2023-11-28

目次

序文	4
Informatica のリソース.....	4
Informatica マニュアル.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ.....	4
Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス.....	5
データ統合のコネクタのドキュメント.....	5
Informatica ナレッジベース.....	5
Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center.....	5
Informatica グローバルカスタマサポート.....	5
 第 1 章 : 2023 年 10 月	6
重要な特記事項.....	6
新機能と改良点.....	7
変更された動作.....	10
アップグレード.....	11
プロセスサーバーの再起動.....	11
 第 2 章 : 2023 年 7 月	12
新機能と改良点.....	12
変更された動作.....	15
アップグレード.....	15
プロセスサーバーの再起動.....	16
プロセスサーバーの相互認証の有効化.....	16
 第 3 章 : 2023 年 4 月	18
新機能と改良点.....	18
新機能と改良点.....	18
変更された動作.....	20
プロセスオブジェクト.....	20
アップグレード.....	21
プロセスサーバーの再起動.....	22
Process Server の PostgreSQL データベースのアップグレードバージョン 14.6 へ.....	22
 索引	23

序文

Informatica Intelligent Cloud ServicesSMアプリケーション統合の 2023 年 10 月リリースの新機能と改良点については、「**新機能**」を参照してください。実行が必要になることがあるアップグレード手順も紹介されています。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト (<http://www.informatica.com/cloud>) にアクセスできます。このサイトには、Informatica Cloud 統合サービスに関する情報が含まれます。

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティを使用して、技術的な問題について議論し、解決します。また、技術的なヒント、マニュアルの更新情報、FAQ（よくある質問）への答えを得ることもできます。

次の Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティにアクセスします。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration>

開発者は、次の Cloud 開発者コミュニティで詳細情報を確認したり、ヒントを共有したりできます。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-developers>

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス

Informatica マーケットプレイスにアクセスすると、データ統合コネクタ、テンプレート、およびマップレットを試用したり購入したりできます。

<https://marketplace.informatica.com/>

データ統合のコネクタのドキュメント

データ統合のコネクタのドキュメントには、マニュアルポータルからアクセスできます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center は、Informatica のセキュリティポリシーおよびリアルタイムでのシステムの可用性について情報を提供します。

Trust Center (<https://www.informatica.com/trust-center.html>) にアクセスします。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center にサブスクライブして、アップグレード、メンテナンス、およびインシデントの通知を受信します。[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページには、すべての Informatica Cloud 製品の実稼働ステータスが表示されます。メンテナンスの更新はすべてこのページに送信され、停止中は最新の情報が表示されます。更新と停止の通知がされるようにするには、Informatica Intelligent Cloud Services の 1 つのコンポーネントまたはすべてのコンポーネントについて更新の受信をサブスクライブします。すべてのコンポーネントにサブスクライブするのが、更新を逃さないようにするための最良の方法です。

サブスクライブするには、[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページで **【サブスクライブして更新】** をクリックします。電子メール、SMS テキストメッセージ、Webhook、RSS フィード、またはこれらの 4 つの任意の組み合わせとして送信された通知を受信するという選択ができます。

Informatica グローバルカスタマサポート

グローバルサポートセンターには、Informatica Network または電話でお問い合わせください。

Informatica Network でオンラインサポートリソースを検索するには、Informatica Intelligent Cloud Services のヘルプメニューで **【サポートにお問い合わせください】** をクリックして、**Cloud サポートページ** に移動します。**Cloud サポートページ** には、システムステータス情報とコミュニティディスカッションが記載されています。追加のリソースの検索が必要な場合や電子メールで Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせいただく場合は、Informatica Network にログインして **【サポートが必要な場合】** をクリックしてください。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト <https://www.informatica.com/services-and-training/support-services/contact-us.html> に掲載されています。

第 1 章

2023 年 10 月

次のトピックでは、Informatica Intelligent Cloud ServicesSMアプリケーションの統合の 2023 年 10 月リリースの新機能、改良点、変更された動作、およびアップグレードタスクについて説明します。

重要な特記事項

2023 年 10 月リリースでは、次の機能と変更された動作をプレビューで利用できるようになります。

プロセスのトレースレベルの自動リセット

クラウドサーバー上で実行するように構成されたプロセスで、トレースレベルを【詳細】または【標準】に設定している場合、トレースレベルは必要に応じて、サーバーによって【フォールト】に自動でリセットされます。この機能は、実行時ログによるプロセス実行時間を短縮するのに役立ちます。

トレースレベルの設定の詳細については、「デザイン」を参照してください。

プレビュー機能は評価を目的としてサポートされていますが、保証対象外で、本番環境または本番環境にプッシュする予定の環境には対応していません。Informatica は、本番環境用の今後のリリースにプレビュー機能を含める予定ですが、市場や技術的な状況の変化に応じて導入を行わない場合もあります。詳細については、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

アクティビティ 実行制限により失敗したプロセス呼び出しに対する追加の制限

10,000 のアクティビティ制限違反が発生してプロセスの呼び出しが失敗した場合、次の 15 分間はプロセスを実行できず、その期間にプロセスデプロイメントの新しいインスタンスは作成されません。ループブレーカメカニズムを持たないプロセスを実行すると、エラーが発生します。プロセスログを確認して、アクティビティ制限違反の根本原因を見つけることができます。

15 分の制限時間が経過した後、またはプロセスを再パブリッシュすることによって、プロセスの実行を再開できます。

以前は、10,000 のアクティビティ制限違反によりプロセスが失敗した場合、プロセスをすぐに実行できました。

プロセス呼び出しのアクティビティ実行制限の詳細については、「呼び出し」を参照してください。

プレビュー機能は評価を目的としてサポートされていますが、保証対象外で、本番環境または本番環境にプッシュする予定の環境には対応していません。Informatica は、本番環境用の今後のリリースにプレビュー機能を含める予定ですが、市場や技術的な状況の変化に応じて導入を行わない場合もあります。詳細については、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

新機能と改良点

このリリースでは、アプリケーションの統合に次のような新機能と改良点が追加されました。

2023 年 10 月リリースの新機能と改良点については、次の新機能ビデオをご覧ください。



JSON ファイルをインポートしてプロセスオブジェクトを作成する機能

JSON ファイルをインポートすることで、JSON ペイロードで使用されるデータ型をカバーする複数の大規模な階層プロセスオブジェクトを簡単に作成できます。

この機能を使用すると、プロセスオブジェクトを手動で作成する必要がなくなるため、時間と労力を節約できます。

JSON ファイルをインポートしてプロセスオブジェクトを作成する方法の詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

アプリケーション統合用の Apache Camel

アプリケーション統合により、Apache Camel がバージョン 3.14 に更新されました。

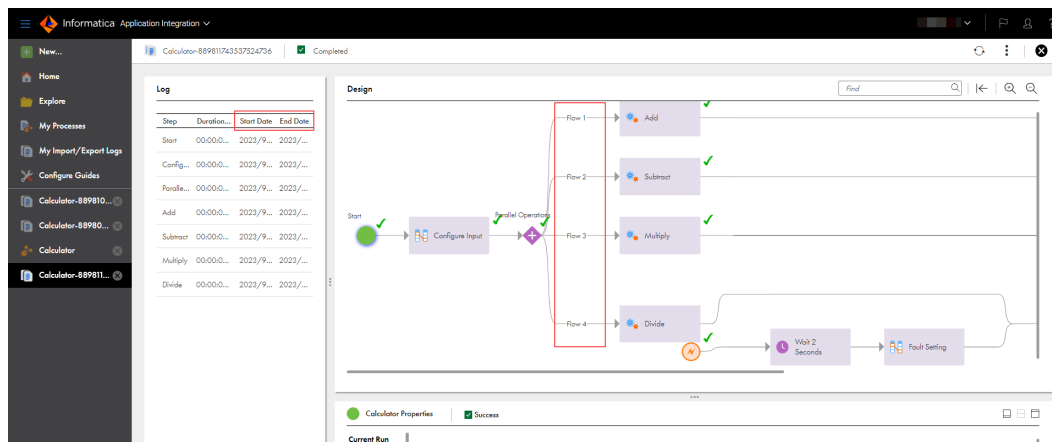
POD (Point of Deployment) が 2023 年 10 月リリースにアップグレードされた後は、特別なアクションは不要です。

[\[自分のプロセス\] ページ](#)

[\[自分のプロセス\]](#) ページでは次の変更が行われています。

- プロセスインスタンス行に **【アクション】** メニューが追加されました。これには、プロセスインスタンスを再起動、削除、再開、一時停止、および停止するためのオプションが含まれています。
- **【プロセスビューの詳細】** ページの **【ログ】** 領域に、**【開始日】** および **【終了日】** フィールドが含まれるようになりました。
- **【プロセスビューの詳細】** ページの並列パスステップに、各パスのシーケンスが表示されます。

次の図は、[【プロセスビューの詳細】](#) ページの変更点を示しています。



データアクセスサービスコネクタでのストアードプロシージャと複数 SQL クエリのサポート

データアクセスサービスコネクタを作成するときに、**[SQL バインディング]** タブで、アクションごとに複数の SQL クエリとストアードプロシージャ呼び出しを定義して、データソースのデータにアクセスできます。

SQL エントリごとに、名前、SQL クエリ、カラムの大文字と小文字、SQL クエリのタイプ、最大行数、最大待機時間（秒）を定義できます。

複数 SQL クエリの作成の詳細については、「**デザイン**」を参照してください。

OData 拡張機能のサポート

データアクセスサービスコネクタでは、アプリケーション接続をパブリッシュした後、OData 拡張パラメータを使用して、データに対してネストされたクエリを実行できます。サービス呼び出しでは、ナビゲーションプロパティの 1 レベルまでをクエリできます。

OData 拡張パラメータの詳細については、「**デザイン**」を参照してください。

[その他] セクションの新しい XQuery 関数

[その他] セクションにある次の新しい XQuery 関数を使用できます。

XQuery 関数名	説明	構文
getOrganizationName	実行中のプロセス、ガイド、サービスコネクタ、またはデータアクセスサービスコネクタのコンテキストで組織名を返します。 注: プロセスが Secure Agent 上でパブリッシュされている場合は、プロセスサーバーを再起動して、実行中のプロセスのコンテキストで組織名を取得する必要があります。	util:getOrganizationName()
getAssetName	関数を使用するプロセスまたはガイドの名前を返します。	util:getAssetName()

XQuery 関数名	説明	構文
getAssetLocation	関数を使用するプロセスまたはガイドが保存されている場所を返します。 getAssetLocation 関数はクラウドサーバー上で実行されるプロセスでのみ使用できます。	util:getAssetLocation()
getInstanceStartTime	プロセスまたはガイドの実行中インスタンスの開始時刻を返します。	util:getInstanceStartTime()

これらの新しい XQuery 関数の詳細については、「デザイン」を参照してください。

RabbitMQ 接続の負荷分散のサポート

Secure Agent クラスタ上で実行される RabbitMQ 接続の負荷分散を設定できます。

RabbitMQ 接続での負荷分散の設定の詳細については、「*RabbitMQ コネクタガイド*」を参照してください。

プロセス呼び出し時の JMS ヘッダーの抽出のサポート

プロセスを呼び出すときに、HTTP ヘッダーに加えて、次の要求コンテキスト関数を使用して、JMS メッセージからヘッダーの詳細を取得できます。

- getAllHeaders
- getDateHeader
- getHeader
- getHeaderNames
- getHeaderOrDefault
- headerExists

これらの関数を使用してヘッダーの詳細を取得すると、出力は HTTP ヘッダーと JMS ヘッダーの両方で同じになります。

これらの関数の詳細については、「デザイン」を参照してください。

クラウドサーバーでの Kafka 接続のサポート

クラウドサーバー上で Kafka 接続を作成し、SSL トラストストアファイルとキーストアファイルをアップロードして SSL 認証と SASL 認証を設定できます。

クラウドサーバー上で Kafka 接続をパブリッシュした後、アプリケーション統合コンソールの **【接続】** ページでイベントソースを開始および停止できます。

この機能を使用すると、イベントベースのプロセスを停止および開始するために接続をパブリッシュ解除して再パブリッシュする必要がないため、時間と労力を節約できます。

例えば、イベントソースが破損したデータを指しているか、または破損したデータを返し、プロセスでそのデータを消費したくない場合は、そのエンドポイントに関連付けられているイベントソースを停止できます。そうすると、そのイベントソースでパブリッシュされたプロセスは新しいメッセージを消費しなくなります。ただし、プロセスの実行中にイベントソースを停止すると、プロセスはバックグラウンドで引き続き実行され、正常に完了します。

注: この機能は、AWS POD でのみ使用できます。

クラウドサーバー上で実行されている Kafka 接続のイベントソースの開始と停止の詳細については、「クラウドアプリケーション統合用コネクタ」と「*Monitor*」を参照してください。

変更された動作

このリリースでは、アプリケーションの統合に次のような変更された動作が追加されました。

単一 SQL クエリの応答形式の変更

データアクセスサービスコネクタで、複数 SQL クエリのサポートが導入されたことに伴い、単一 SQL クエリおよび複数 SQL クエリに対する XML 応答は、multiDataAccessResponse タグで始まり、その後に dataAccessResponse タグが続くようになります。

次のスニペット例は、新しい XML 応答形式を示しています。

```
<multiDataAccessResponse>
  <dataAccessResponse>
    <result statementId="SQL Name 1">
      <row>
        <table_catalog>activevos</table_catalog>
        <table_schema>public</table_schema>
        <table_name>aeb4ptaskpa</table_name>
        <table_type>BASE TABLE</table_type>
        <self_referencing_column_name/>
        <reference_generation/>
        <user_defined_type_catalog/>
        <user_defined_type_schema/>
        <user_defined_type_name/>
        <is_insertable_into>YES</is_insertable_into>
        <is_typed>NO</is_typed>
        <commit_action/>
      </row>
    </result>
  </dataAccessResponse>
</multiDataAccessResponse>
```

以前は、単一 SQL クエリ要求を行うと、対応する XML 応答は dataAccessResponse タグで始まっていました。

次のスニペット例は、以前の XML 応答形式を示しています。

```
<dataAccessResponse statementId="SQL Name 1">
  <row>
    <table_catalog>activevos</table_catalog>
    <table_schema>public</table_schema>
    <table_name>aeb4ptaskpa</table_name>
    <table_type>BASE TABLE</table_type>
    <self_referencing_column_name/><reference_generation/>
    <user_defined_type_catalog/><user_defined_type_schema/>
    <user_defined_type_name/>
    <is_insertable_into>YES</is_insertable_into>
    <is_typed>NO</is_typed>
    <commit_action/>
  </row>
</dataAccessResponse>
```

単一 SQL クエリおよび複数 SQL クエリの詳細については、「デザイン」を参照してください。

データアクセスサービスコネクタの応答ペイロード内のメタデータの変更

データアクセスサービスコネクタで、[https:// <Informatica Intelligent Cloud Services URL>/active-bpel/odata/v4/<app connection name>/\\$metadata](https://<Informatica Intelligent Cloud Services URL>/active-bpel/odata/v4/<app connection name>/$metadata) URI を使用して特定のアプリケーション接続のメタデータの詳細を要求した場合、ナビゲーションプロパティ定義には、応答ペイロード内のナビゲーションプロパティ名のエンティティのみが含まれます。

次のスニペット例は、応答ペイロードの新しい形式を示しています。

```
<NavigationProperty Name="Section0DataTest"
Type="Informatica.OData.AppConnectionTestSqlServer1.Models.Section0DataTest">
  <ReferentialConstraint Property="sectionid" ReferencedProperty="sectionid"/>
</NavigationProperty>
```

以前は、ナビゲーションプロパティ名には外部キーへの参照も表示されていました。

次のスニペット例は、応答ペイロードの以前の形式を示しています。

```
<NavigationProperty Name="Student0DataTest_REFERS_T0_Section0DataTest_VIA_FK__Student0D__secti__67442390"
  Type="Informatica.OData.AppConnectionSQLServer1.Models.Section0DataTest">
  <ReferentialConstraint Property="sectionid" ReferencedProperty="sectionid"/>
</NavigationProperty>
```

データアクセスサービスコネクタの応答ペイロードの詳細については、「デザイン」を参照してください。

アップグレード

以下のトピックでは、2023 年 10 月リリースへのアップグレード後に実行する必要があるタスクについて説明します。

プロセスサーバーの再起動

このリリースの一部として、Secure Agent のプロセスサーバーサービスが更新されました。この更新はサービスに影響を与えず、エージェントプロセスはそのまま動作を続行します。更新のデプロイメントの結果、プロセスサーバーサービスのステータスが **再起動が必要です** と表示されます。

プロセスサーバーのアップグレード再起動スケジュールを設定している場合、再起動はスケジュールに従って自動的に実行されます。再起動スケジュールを設定していない場合、デフォルトでは、再起動は POD (Point of Deployment) アップグレードの 7 日後に実行されます。

都合に合わせてプロセスサーバーを手動で再起動して最新の更新を取得する場合は、次の手順を実行します。

1. [管理者] サービスを開いて **ランタイム環境** を選択します。
2. **ランタイム環境** ページで、Secure Agent の名前をクリックします。
注: Secure Agent グループ内の Secure Agent を一覧表示するには、Secure Agent グループの展開が必要になる場合があります。
3. **詳細** タブをクリックします。
4. **エージェントサービスの開始または停止** 領域で、サービスに **プロセスサーバー** を選択します。
5. **停止** をクリックします。
6. **開始** をクリックしてプロセスサーバーサービスを再起動します。サービスが起動すると、ステータスが **稼働中** に変わります。サービスの起動に失敗する場合は、監査ログを確認してエラーの原因を突き止めます。

Secure Agent の詳細については、Administrator ヘルプシステムの「ランタイム環境」を参照してください。

第 2 章

2023 年 7 月

次のトピックでは、Informatica Intelligent Cloud ServicesSMアプリケーションの統合の 2023 年 7 月リリースの新機能、改良点、変更された動作、およびアップグレードタスクについて説明します。

新機能と改良点

このリリースでは、アプリケーションの統合に次のような新機能と改良点が追加されました。

2023 年 7 月リリースの新機能と改良点については、次の新機能ビデオをご覧ください。



Secure Agent でログのデータソースを設定する機能

Secure Agent 上でログのデータソースを個別に設定してプロセスログを既存のデータベースからデータソースにリダイレクトすることで、既存のデータベースの負荷を軽減できます。

注: Secure Agent で別のログのデータソースを設定した後に、変更を有効にするためにプロセスサーバーを再起動する必要があります。

ログのデータソースの詳細については、Administrator ヘルプシステムの「*Secure Agent* サービス」を参照してください。

プロセスオブジェクトの追加フィールド

プロセスオブジェクトエディタとサービスコネクタエディタに、テキスト、日付、時刻、日時、整数、および数値データ型に対する次の新しいフィールドが追加されました。

- テキストデータ型の文字長とテキスト形式
- 日付データ型の日付範囲
- 日時データ型の日時範囲
- 時刻データ型の時刻範囲
- 整数データ型の最小値と最大値
- 数値データ型の最小値と最大値

プロセスオブジェクトの詳細については、「デザイン」を参照してください。

ガイド実行 URL

ガイドを保存してパブリッシュすると、ガイドの【**プロパティの詳細**】ページで実行 URL を表示できます。この実行 URL を使用してガイドを実行できます。

ガイドのパブリッシュと実行の詳細については、「呼び出し」を参照してください。

ヒューマンタスクアセットでのガイドの生成

ヒューマンタスクアセットを作成すると、アセット内で定義したすべての入力フィールド、出力フィールド、および結果を含む新しいガイドをすぐに作成できます。ガイドを生成した後に、ガイドをさらに設定し、ガイドをパブリッシュして使用することができます。この機能を使用すると、ガイドを手動で作成する手間を省くことができます。

ガイドの生成の詳細については、「デザイン」を参照してください。

ヒューマンタスクアセットでのプロセスオブジェクトのサポート

ヒューマンタスクアセットを作成する際に、入力フィールドと出力フィールドにプロセスオブジェクトを含めることができます。アプリケーション統合でプロセスオブジェクトを作成し、そのオブジェクトをヒューマンタスクアセットで使用する必要があります。この機能を使用すると、人口統計的なデータのタイプごとに個別のフィールドを作成する代わりに、名前、住所、電話番号、その他の情報などのさまざまな詳細を含むグループを作成できます。

ヒューマンタスクアセットでのプロセスオブジェクトの使用に関する詳細については、「デザイン」を参照してください。

データアクセスサービスコネクタのセキュリティの向上

データアクセスサービスコネクタを作成すると、悪意のある入力パラメータを通じて発生する可能性のある SQL インジェクション攻撃を防止または軽減できます。この操作を行うには、データアクセスサービスコネクタページで新しい【**SQL インジェクションの確認**】フィールドを設定します。また、データアクセスサービスコネクタを使用するアプリ接続で、新しい【**SQL インジェクションのチェック**】フィールドを設定する必要があります。データアクセスサービスコネクタの詳細については、「デザイン」を参照してください。

SMTP サービスでの OAuth 認証のサポート

アプリケーション統合コンソールで、SMTP サービスの認証タイプの 1 つとして OAuth 認証を選択できます。OAuth は、ユーザー名、パスワード、その他の情報を非公開にして、特定のデータをアプリケーションと共有する場合に役立ちます。

認証 URL、トークン URL、クライアント ID、クライアントシークレット、スコープなどの OAuth 設定を設定できます。認証ステータスと、認証が完了した直近の時刻を表示することもできます。

SMTP サービスの詳細については、「デザイン」を参照してください。

ガイド内の単純型のリストのサポート

ガイド内で、入力フィールド、出力フィールド、および一時フィールドに対して単純データ型の次のリストを設定できます。

- チェックボックス
- 日付
- 日付/時刻
- 時間
- 数
- Integer
- テキスト

ガイドを作成する際に、チェックボックス、日付、日時、時刻、数値、整数、およびテキスト値のカンマ区切りリストを定義できます。

単純型のリストを使用したガイドの作成に関する詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

ガイドでの Salesforce 拡張ドメインのサポート

Salesforce 拡張ドメインで有効になっているコミュニティサイトでガイドを開くことができます。

Salesforce ガイドの詳細については、「[Salesforce とアプリケーション統合](#)」を参照してください。

サービスコネクタでの XML データ型のサポート

サービスコネクタを作成する際に、XML データ型を使用して入力フィールドと出力フィールドを定義し、XML 値をフィールドに直接渡すことができます。

サービスコネクタでの XML データ型の使用に関する詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

データアクセスサービスコネクタのテーブルフィルタ

データアクセスサービスコネクタを作成する際に、スキーマの名前、メタデータに含めるテーブル、およびメタデータから除外するテーブルを指定してテーブルをフィルタリングできます。適切な結果を表示するには、データアクセスサービスコネクタを使用するアプリ接続にも同様の詳細を入力する必要があります。

データアクセスサービスコネクタの詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

[その他] セクションの数値に対する trunc 関数

[その他] セクションの新しい xquery trunc 関数を使用して、精度で指定された小数点以下の桁数に基づいて数値を特定の桁に切り詰めることができます。trunc 関数には次の構文を使用します。

Util:trunc(arg, precision)

例えば、次の式は結果として 2345.75 を返します。

util:trunc(2345.7535, 2)

trunc 関数の詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

変更された動作

このリリースでは、アプリケーションの統合に次のような変更された動作が追加されました。

IP アドレス許可リストの削除

管理者の【組織】ページの信頼済み IP 範囲にアプリケーション統合の IP アドレスを手動で追加する必要がなくなりました。

以前は、組織が Informatica Intelligent Cloud Services およびアプリケーション統合を使用していてユーザーが保護ファイアウォールを使用している場合は、対応するドメイン名または IP アドレス範囲を、承認済みの IP アドレスのリストにホワイトリスト登録する必要がありました。

IP アドレスの許可リストの詳細については、「アプリケーション統合用の IP アドレス範囲のホワイトリストへの登録」を参照してください。

サービスコネクタ

サービスコネクタには次のような変更が追加されました。

- フィールドを含んだ行の任意の場所をクリックすると、すべてのフィールド値を一度に編集できるようになりました。値を入力した後に、行の外側の任意の場所をクリックするか、Enter キーを押して行内の値を保存します。以前は、編集する値を 1 つずつしかクリックできませんでした。
- サービスコネクタを読み取り専用モードで表示すると、【エージェントのみ】オプションの値がチェックボックスの形式で表示されます。以前は、値はテキスト、つまり **[true]** または **[false]** と表示されていました。

次の図に、読み取り専用モードのサービスコネクタの【エージェントのみ】オプションを示します。

CommonUIServiceConnector (Read-only) | Valid

Edit Publish

Definition Actions Process Objects

Name: * CommonUIServiceConnector
(Unpublish connector to edit name)

Location: * Default

Description: Interacts with Edmunds car services.

Agent Only: ☒

Connection Properties (1)

Name	Description	Test With	Type	Required	Encrypt
API_Key *	Edmunds API Key		string	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

アップグレード

以下のトピックでは、2023 年 10 月リリースへのアップグレード後に実行する必要があるタスクについて説明します。

プロセスサーバーの再起動

このリリースの一部として、Secure Agent のプロセスサーバーサービスが更新されました。このリリースにアップグレードすると、プロセスサーバーが自動的に再起動します。

これによりダウンタイムが発生し、プロセスサーバーが起動して実行されるまで、スケジュールされたプロセスを含むプロセスはトリガされません。

メジャーリリースとマイナーリリースのアップグレードプロセスの詳細については、次のナレッジベースの記事を参照してください。

https://knowledge.informatica.com/s/article/iics-runtime-continuity-faq?language=en_US

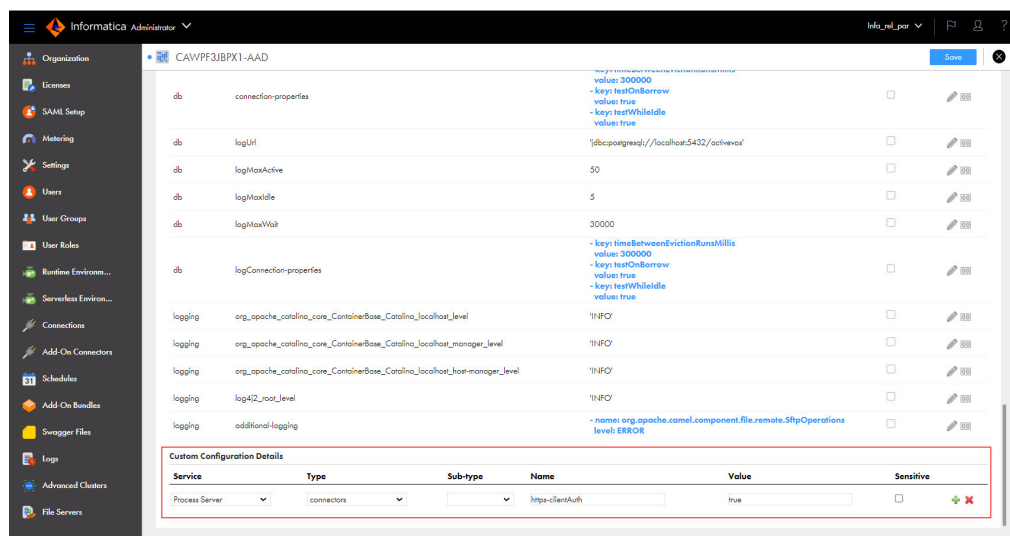
プロセスサーバーの相互認証の有効化

プロセスサーバーを最新のパッケージでアップグレードすると、以前のバージョンの `server.xml.mustache` ファイルに対して行った相互認証の変更が失われます。さらに、新しいアップグレードにはダウンタイムが必要になります。

プロセスサーバーを最新のパッケージで再起動するたびに `server.xml.mustache` ファイルを手動で更新する代わりに、Administrator からプロセスサーバーの相互認証を有効にすることができます。

Administrator から相互認証を有効にするには、次の手順を実行します。

1. [Administrator] で、[ランタイム環境] を選択します。
2. [ランタイム環境] ページで、Secure Agent の名前をクリックします。
Secure Agent グループ内の Secure Agent を一覧表示するには、Secure Agent グループの展開が必要になる場合があります。
3. [詳細] タブをクリックします。
4. 右上隅の [編集] をクリックします。
5. [カスタム構成の詳細] 領域までスクロールダウンします。
6. すでに設定されているカスタムプロパティがある場合は、[追加] アイコンをクリックして、新しいプロパティ行を追加します。
7. サービスとして [プロセスサーバー] を選択します。
8. 設定プロパティのタイプを [コネクタ] に選択します。
9. 次の図に示すように、プロパティ名に `https-clientAuth` と入力し、値を `true` と入力します。



10. **【保存】** をクリックします。

プロセスサーバーサービスのステータスが**【再起動が必要です】**と表示されます。

11. 変更を有効にするためにはプロセスサーバーを再起動する必要があります。

server.xml.mustache ファイルを手動で更新してプロセスサーバーの相互認証を有効にする方法については、次のコミュニティの記事を参照してください。

https://knowledge.informatica.com/s/article/611562?language=en_US

第 3 章

2023 年 4 月

次のトピックでは、Informatica Intelligent Cloud ServicesSMアプリケーションの統合の 2023 年 4 月リリースの新機能、改良点、およびアップグレードタスクに関する情報を提供します。

新機能と改良点

Informatica Intelligent Cloud ServicesSMアプリケーションの統合の 2023 年 4 月リリースには、以下の新機能と改良点が含まれています。

新機能と改良点

アプリケーション統合には、次の新機能と改良点が含まれています。

API をアクティブ化および非アクティブ化する機能

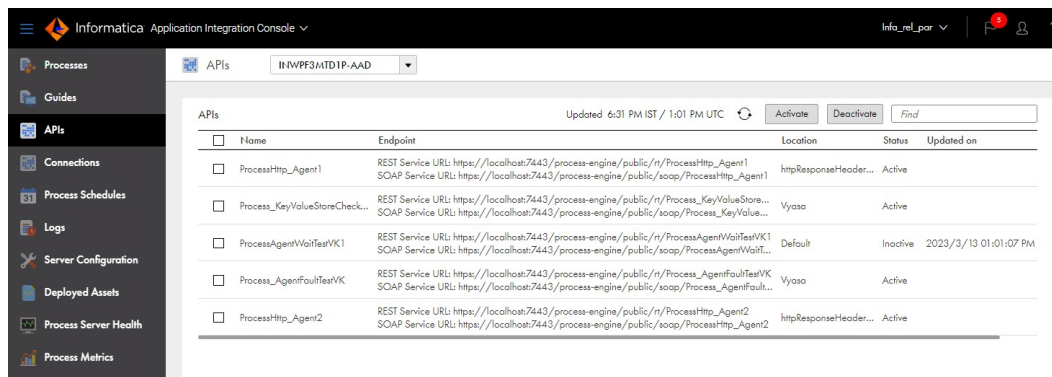
REST/SOAP バインディングを使用しているパブリッシュ済みプロセスの API をアクティブ化および非アクティブ化できます。この機能を使用すると、API を非アクティブ化およびアクティブ化するためにプロセスをパブリッシュ解除して再びパブリッシュする必要がないため、時間と労力を節約できます。API（REST エンドポイントと SOAP エンドポイント）は、アプリケーション統合コンソールの **[API]** ページからアクティブ化および非アクティブ化することができます。

例えば、アプリケーション統合を使用して開発した API を介して、Web ポータルで資金移動する機能を提供している銀行について考えてみましょう。この銀行は、将来の監査と監視を行うために、Oracle データベースを使用して取引情報を保存しています。

データベースのメンテナンス中は、受信要求に関する問題が発生しないようにトランザクションを一時的に停止したいと考えています。

このケースでは、銀行は資金移動を可能にするすべての API をフィルタリングして見つけ、それらを無効にすることができます。ダウンタイム中に顧客が非アクティブ化された API を呼び出すと、503 サービスが使用不可能になりましたというメッセージまたは同等のメッセージが表示されます。メンテナンスが完了したら、API をアクティブ化して資金移動を再開できます。

次の図は、**[API]** ページを示しています。



注: この機能は、POD のアップグレードとプロセスサーバーの再起動を行ってから 7 日後に使用できます。

パブリッシュ済みプロセスの API をアクティブ化および非アクティブ化する機能の詳細については、*Monitor* を参照してください。

呼び出し作業マネージャスレッドプール設定を構成する機能

プロセス呼び出しの場合、**アプリケーション統合コンソール**の【**サーバー設定**】ページで、作業マネージャスレッドプールサイズが使用するスレッドの数を個別に制御できます。

Secure Agent 上で実行されるプロセス呼び出しに対して、個別の作業マネージャスレッドプール設定を構成できます。

呼び出し作業マネージャスレッドプール設定の詳細については、*Monitor* を参照してください。

サービスコネクタで DELETE 要求の本文を送信する機能

サービスコネクタで **DELETE** 要求の本文を送信することができます。サービスコネクタで、**POST**、**PUT**、と **PATCH** 動詞に加えて、**DELETE** 動詞のバインディングタイプを設定できるようになりました。バインディングタイプを【**カスタム**】として選択した場合、【**本文**】フィールドが表示され、サービスに送信する要求を入力できます。

サービスコネクタで使用する動詞の詳細については、「**デザイン**」を参照してください。

Salesforce 接続での API バージョン 56.0 のサポート

アプリケーション統合では、新しい Salesforce 接続を作成する際のパスワード認証および OAuth ベースの認証用に、Salesforce API バージョン 56.0 がサポートしています。この機能のサポートにより、Salesforce API バージョン 56.0 によって提供されているさまざまな新しいデータオブジェクトとメタデータタイプを使用できるようになります。例えば、個々のアカウントに対応する連絡先の請求先住所または配送先住所を表す **ContactPointAddress** オブジェクトを使用できます。

注: Salesforce アプリケーション接続の新機能を使用するには、Salesforce にインストールされている管理パッケージをアップグレードする必要があります。

Salesforce の管理パッケージのアップグレードの詳細については、<https://docs.informatica.com/integration-cloud/application-integration/current-version/salesforce-and-application-integration/salesforce-managed-package/upgrading-the-salesforce-managed-package.html> を参照してください。

Salesforce オブジェクトとサービスの詳細については、*Salesforce コネクタガイド*を参照してください。

FTP 接続の負荷分散のサポート

FTP 接続で負荷分散を設定できます。負荷分散オプションを有効にすると、プロセスサーバーは、負荷分散を確実にするため、Secure Agent クラスタ内の複数の Secure Agent マシン間でルートを分散させます。

Secure Agent クラスタ上で実行される FTP 接続の負荷分散を設定できます。

FTP 接続での負荷分散の設定の詳細については、「*FTP コネクタガイド*」を参照してください。

電子メール接続の OAuth 認証のサポート

電子メールアプリケーション接続の認証タイプの 1 つとして、OAuth 認証を選択できます。

認証 URL、トークン URL、クライアント ID、クライアントシークレット、スコープなどの OAuth 設定を構成できます。認証ステータスと、認証が完了した直近の時刻を表示することもできます。その後、転送されて、新しい Microsoft Outlook アカウントを作成するか、既存の Microsoft Outlook アカウントを使用して認証プロセスを完了するように求められます。

電子メールアプリケーション接続の OAuth 認証サポートの詳細については、「[電子メールコネクタガイド](#)」を参照してください。

データアクセスサービスコネクタの OData のサポート

データアクセスサービスコネクタで OData プロトコルを有効にして、データサービスにアクセスできます。この機能を使用するには、コネクタ作成ページの **【定義】** タブで、**【OData の使用】** オプションを有効にします。**【アクション】** タブで、次のプロパティを設定することもできます。

- SQL クエリのカラムの大文字と小文字
- SQL トランスフォーメーションが返すことができる行の最大数。行の最大数は 10,000 行以下にする必要があります。
- データベースクライアントがセッションをタイムアウトするまでにデータベースからの応答を待機する最大時間（秒）

データアクセスサービスコネクタの **【OData の使用】** オプションを有効にした後、OData を有効にし、データアクセスサービスコネクタを使用する接続で、OData で許可されたユーザーとグループを指定できます。アプリケーション接続をパブリッシュした後、アプリケーション接続の **【プロパティの詳細】** ページで、OData サービス URL と OData Swagger URL を確認できます。

注: この機能は、POD のアップグレードとプロセスサーバーの再起動を行ってから 7 日後に使用できます。

データアクセスサービスコネクタで OData プロトコルを有効にする方法の詳細については、「[デザイン](#)」を参照してください。

RabbitMQ コネクタに対する証明書ベースの TLS 認証または SSL 認証のサポート

Secure Agent マシンに保存されているキーストアファイルを使用して、RabbitMQ コネクタに対する TLS 認証または SSL 認証を設定できます。キーストアファイルには、RabbitMQ ブローカとの双方向の安全な通信を確立するためのキーと証明書が含まれています。

RabbitMQ コネクタに対するクライアント証明書の使用の詳細については、「[RabbitMQ コネクタガイド](#)」を参照してください。

変更された動作

Informatica Intelligent Cloud Services アプリケーションの統合の 2023 年 4 月リリースでは、以下の動作が変更されています。

プロセスオブジェクト

プロセスオブジェクトには次の変更が行われています。

- プロセスオブジェクトの場所を選択する **【選択】** ボタンの名前が **【参照】** に変更されました。

- **【オブジェクトリスト】** タイプまたは **【参照】** タイプに **【検索】** ボックスが追加され、プロセスオブジェクトを簡単に検索できるようになりました。以前は、リストをスクロールする方法でしかプロセスオブジェクトを選択できませんでした。
- **【選択リスト】** および **【複数選択リスト】** 型のオブジェクトを、カンマを使用して区切ることができるようになりました。以前は、オブジェクトはセミコロンを使用して区切られていました。
注: セミコロンの区切り文字を含む **【選択リスト】** および **【複数選択リスト】** 型の既存のフィールドは影響を受けません。
- フィールドを含む行をドラッグアンドドロップして、プロセスオブジェクト内のフィールドを並べ替えることができます。以前は、各行の **【上矢印】** および **【下矢印】** アイコンを使用してフィールドを並べ替えることができました。
- フィールドを含む行の任意の場所をクリックすると、すべてのフィールド値を一度に編集できるようになりました。以前は、編集する値を 1 つずつしかクリックできませんでした。

次の図は、プロセスオブジェクトフィールドの変更点を示しています。

The screenshot displays the 'ProcessObject4' configuration window. It includes a 'Properties' section with fields for Name (EmployeeDetails), Location (Default), and Description. A 'Browse' button is next to the Location field. Below is a 'Fields' section with a table listing fields and their properties.

Name*	Label	Type	Required	Nullable
List1	Employee	Multi-Select Picklist Options: Comma separated values	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Address	Address	Object List View Referenced Process Object	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

A search dropdown is open for the 'Object List' field, showing a list of process objects including Alert Details, Any, Data Marketplace Parameters, Data Marketplace Path Variables, Data Marketplace Query Parameters, Generic Human Role, Human Task, and Human Task Assignment.

プロセスオブジェクトの詳細については、「デザイン」を参照してください。

アップグレード

以下のトピックでは、2023 年 10 月リリースへのアップグレード後に実行する必要があるタスクについて説明します。

プロセスサーバーの再起動

このリリースの一部として、Secure Agent のプロセスサーバーサービスが更新されました。この更新はサービスに影響を与えず、エージェントプロセスはそのまま動作を続行します。更新のデプロイメントの結果、プロセスサーバーサービスのステータスが **再起動が必要です** と表示されます。

プロセスサーバーのアップグレード再起動スケジュールを設定している場合、再起動はスケジュールに従って自動的に実行されます。再起動スケジュールを設定していない場合、デフォルトでは、再起動は POD (Point of Deployment) アップグレードの 7 日後に実行されます。

都合に合わせてプロセスサーバーを手動で再起動して最新の更新を取得する場合は、次の手順を実行します。

1. [管理者] サービスを開いて **ランタイム環境** を選択します。
2. **ランタイム環境** ページで、Secure Agent の名前をクリックします。
注: Secure Agent グループ内の Secure Agent を一覧表示するには、Secure Agent グループの展開が必要になる場合があります。
3. **詳細** タブをクリックします。
4. **エージェントサービスの開始または停止** 領域で、サービスに **プロセスサーバー** を選択します。
5. **停止** をクリックします。
6. **開始** をクリックしてプロセスサーバーサービスを再起動します。サービスが起動すると、ステータスが **稼働中** に変わります。サービスの起動に失敗する場合は、監査ログを確認してエラーの原因を突き止めます。

Secure Agent の詳細については、Administrator ヘルプシステムの「ランタイム環境」を参照してください。

Process Server の PostgreSQL データベースのアップグレードバージョン 14.6 へ

プロセスサーバーの PostgreSQL データベースをバージョン 12.4、12.6、または 13.5 からバージョン 14.6 にアップグレードできます。バージョン 14.6 ではセキュリティ、パフォーマンス、および拡張性が強化されています。

レプリケーション手法を使用すると、Secure Agent の PostgreSQL データベースを簡単にアップグレードできます。レプリケーション手法を使用した PostgreSQL データベースのアップグレードの詳細については、[Upgrading the PostgreSQL database using the replication technique](#) を参照してください。

Informatica が提供するスクリプトを手動で実行することで、都合に合わせてアップグレードを行うこともできます。このスクリプトを実行すると既存のデータベースバージョンのバックアップが作成され、アップグレードで問題が発生した場合でも古いデータベースバージョンに復元することが可能です。

PostgreSQL データベースをアップグレードする方法の詳細については、次のコミュニティ記事を参照してください。

<https://network.informatica.com/docs/DOC-18945>

索引

C

Cloud Application Integration コミュニティ

URL [4](#)

Cloud 開発者コミュニティ

URL [4](#)

I

Informatica Intelligent Cloud Services

Web サイト [4](#)

Informatica グローバルカスタマサポート

連絡先情報 [5](#)

W

Web サイト [4](#)

あ

アップグレード通知 [5](#)

し

システムステータス [5](#)

す

ステータス

Informatica Intelligent Cloud Services [5](#)

め

メンテナンスの停止 [5](#)